

【現代語訳】

八幡別当頼清の遠い親類に、永秀法師という者がいた。家が貧しくて、風流心があった。日夜、笛を吹く以外のことをしなかった。やかましさに耐え切れなくなった隣家、徐々に立ち去った後には人もいなくなったけれども、まったく気にも止めなかった。そのように貧しかったけれども落ちぶれた振る舞いなどをしなかったので、そうは言ってもやはり卑しがるような人はいなかった。頼清は（この状況を）聞き、同情して使いをやつて「どうして何事もおっしゃらないのか。このようで（私には別当をしております）ございますので、そうでない人（親戚でない人）でさえ、何かにつけて頼み事ばかりをしてきて、それを承るのでございます。（私のことを）縁遠くお思いにならなつてはいけません。頼りたいことがあるようなときは、遠慮せずにおっしゃられよ」と使いに言わせたところ、「重ね重ね、恐れ多いことでございます。数年来、申し上げたいと思つていながら、身の上の卑しさゆえに、一方は恐れ多く、一方では遠慮をして時を過ぎてまいりました。強く望み申し上げることがございます。すみやかに参上して申し上げます」と言つた。「つまらない同情をかけたせいで、何事か面倒なことでも言ってくるのであろうか」と思つたけれども、「あの者程度の者に（何を言つてこられようが）、どれほどのことがあろうか（いやたいしたことはあるまい）」と侮つて過ごしている間に、ある日の夕方ごろにやつて来た。すぐに会つて、「何事ですか」と言つた。（永秀は）「並大抵でなく欲しい物がございましたが、（欲しいと）思い申し上げて過ごしてまいりました時に、先日いただいたお話

（「頼りたいことがあるときは何でもおっしゃつてください、と頼清が言つたこと）が嬉しくて、ためらいなく参上いたしました」と言つた。「間違いなく、領地などを希望するに違いないようだ」と思つて、これを尋ねると、「筑紫に（あなたの）ご領地がたくさんございますので、漢竹で作つた笛で、上手にできました笛を一ついただきましたのです。これが、私にとって最高の望みでございますが、卑しい身分の私には得ることができない物で、長年手に入れることができていません」と言つた。

（頼清は）予想外に、たいそう気の毒に思われて、「それはとつてもたやすいことです。すみやかに探し求めて差し上げましょう。その他にご入用なものはございませんか。月日をお送りなさつていらっしゃるようなこと（日常のもの）も、いぶかしくはございませんが、そのようなものでもどうして承らないことがございましょうか（承りましょう）」と言つと、「お気持ちは恐れ多いことでございます。しかし、それ（日常のもの）は、十分間に合つてございます。二、三月にこのように帷子を一つ用意したので、十月までは、まったくほしいものはございません。また、朝夕の事（食事）は、自然とあるに任せて、どうかかこうにかして過ごしてまいります」と言つた。

「実に風流心があることよ」と、しみじみと滅多にないことと思われて、笛を急いで探して送つたという。